

「記紀まほろば紀行探索」のまとめ

(1)はじめに

記紀神話に始まり、代表的な世界神話の一部を垣間見ることができました。また世界の古代遺跡も一部ですが、海外ツアーで見学して古代人の偉大な文化遺産に感動させられました。「人類の歴史」を飛び越えて「地球の歴史」から「宇宙の歴史」入口まで荒削りですが辿りつくことで人類歴史の全体像をより広範囲に捉えることができるようになりました。

内容は石器時代から現在まで広範囲な人間の歴史の内、ほんの一部の古代に限ってしかも特別の時代(縄文時代から古墳時代)と特別の地域(記紀神話故郷と東北地方)に限定されたものです。具体的には「古事記・日本書紀」(以下記紀と略記)の神話時代と東北古代に係わるものに限定した探索です。

(2)歴史との触れあい

幼少時代における個人的な神社仏閣・古代遺跡との触れあいは以下のように数少ない。

①ロウアー・セカンダリースクール時代

毎年春・桜が咲く頃に、住吉神社の春祭りで男の子は祭りの拍子太鼓を敲く役割でだんじり屋台に乗せて貰うことが楽しみで住吉神社へお参りした記憶があります。また夏休みには村のお寺で、お経を習ったことが仏教とのつながりとして記憶がある。小中学生の頃、播磨風土記に登場するメガ山(※1)で弥生式土器が発見された場所を野次馬根性で行った記憶がある。中学時代、お坊様で教師の先生から夏休みにお寺の墓発掘調査に誘われたが気持ちが進まずお断りました。

(※1) (メガ山)

播磨風土記によると女鹿山(めがやま)は「鹿咋山(かくいやま)」とあり、応神天皇がこの地に狩りに来られた時に「自分の舌を食べている白い鹿に出会われた」ので鹿咋山と言い、山頂に小規模な前方後円墳群がある。

②ハイスクール時代

播磨風土記に飯盛山(※2)という珍しい名前の山が有り、長年経過して解ったことは、全国各地に同名の山が沢山あり、播磨風土記にも記載されていて、大汝命(オオナムチミコト)にこの山で飯を盛ったと記載があるが、稲作に必要な農業用水の源流で、稲の豊作を感謝して柏の葉に飯を盛り神前に供えた神聖な山からついた名前と判明。

(※2) (飯盛山)

山や丘陵などの名称として全国各地に「飯盛山」が沢山ありますが播磨風土記で賀茂郡の檜原里に「飯盛嵩」と言う山があり「大汝命(オオナムチミコト)に御飯をこの嵩で盛ったから呼ぶ」と記載されている。

①山自体がご飯を「高盛り」したような円錐状の外見が美しい山である。この周辺に住む人達は神の鎮座する特別な山と感じたようである。

②山と稲作との関係で不可欠な灌漑用水を供給し、飲み水の水源地として、人々はこの山を米作りを司る神の山、豊作を感謝してその実り(御飯)を祭り聖地と仰ぎ神の山として崇敬したものである。その証しに飯盛山の山麓には現在も天満宮と稲荷社が鎮座している。

③飯盛山の名称由来は神の降臨を仰ぎ、収穫に感謝し、新米の「御飯」を盛り神の食事(食膳)とする厳粛な神事があった。柳田国男によれば「盛り」には「物を高く積み上げ一杯にする」という意味と「神を酒食でもてなし、一緒になって歓待する」との意味がある。

③学生時代

学生時代、和辻哲郎の「古寺巡礼」がブームで建築の学生達が建築様式の勉強とハイキングを兼ねて、奈良の神社仏閣見学に数回参加した記憶が有る。

④社会人時代

就職後は気が向いたら国内勤務先の若狭とか瀬戸内海地方の神社お寺を見学することが有った。また、国外では、海外ツアー旅行で、エジプト、イタリア、ドイツ、フランス、スペイン等の古代遺跡、異国文化、キリスト教文化と初めて遭遇でき、日本の古代遺跡と異なる文化体験で強烈なカルチャーショックを受けたと言う記憶が有ります。

⑤社会人卒業後

社会人卒業後はシニア生活の3本柱として以下を念頭において活動しました。

1. 健康づくり : 歴史探索・自然観察兼用ハイキング、奥之院健康登拝
2. 文化ふれあい : 古代史講座、旅行(計画・記録)、家庭菜園、読書・エッセイ等

3. ボケ防止 : 科学、IT、自然・宇宙等新技術等の収集と体験へのチャレンジ

(3)歴史探索活動

社会人を卒業後、シニア学舎で初めて、古代文化歴史勉強会に参加すると同時に「隠れ里会」のメンバーと一緒に、日帰りや3泊4日程度の歴史探索ツアーが始まりました。

シニアでの「歴史探索活動」の始まりは、宝塚市のフレミラ教室、兵庫県阪神シニア大学HSC、大阪シニア自然大学等で、ボケ防止を兼ねて様々な講座を受講したことが切っ掛けでした。

特にHSC(阪神シニア)で歴史探索同好会に参加した事で古代史勉強会と歴史探索会が始まる。勉強会は担当者の持ち回り方式で法隆寺を最初に、その後記紀の訳本で出雲神話と出会い出雲古代史(神話)に興味を魅かれて記紀神話のふるさとを探访したくなりました。

出雲探索の準備段階で出雲の古代史予備知識を得ようとして調査を始めた所、歴史専門家の書籍は自分の専門分野には詳しく、反面その地方の古代史全体像を知る上では10冊程度の本を読む必要があり、これは不便な事だと思い知り、1時間程度でその地域の古代史の全体像が分かる歴史メモがあれば便利だと思い「出雲古代史メモ」を作成する事に着手しました。その後も歴史探索計画(3泊4日程度)立案時に探访地点の古代史を予備調査して歴史メモを作成する事にしました。

記紀関連の古代史探访は出雲の後、九州へ移り。「壱岐・対馬」から始まり北九州の記紀関連遺跡を探访して、最後に南九州を訪問して九州編を終えました。

その後は、記紀から離れて東北古代遺跡を3回に分けて探访することにしました。東北古代の歴史探索は青森縄文文化との遭遇に始まり、第2回は大和朝廷の東北進出の基盤となった北上川沿いに北上して蝦夷征圧の城柵を巡り、最終第3回は秋田から日本海を見ながら山形鶴岡まで城柵を巡りながら南下した所で急病人が出て、私は鶴岡で中止止む無くに至りました。これを以って東北古代探索は一区切り終え、残された地点は関東と中部となりました。取り合えず、関東の古代探索を構想する為、文献調査をしている段階ですがメンバーの高齢化で、3泊4日の探索行程がきつくなりました。

記紀神話がきっかけで世界神話にも興味を魅かれました。どの神話も共通して混沌としたカオスの世界に神が現われると言う話で始まり、神話はどこでも世界共通の同じ発想であると感じました。中でもインド神話の素晴らしい絵巻物が彫刻されたアンコールワットの旅は特に印象に残りました。最も衝撃を受けたのは、紀元前3000年以上昔に象形文字を残し、世界最大のピラミッドを建造したエジプトの文化とその遺跡です。中国の漢字文化も素晴らしい。ナスカの地上絵はドローンも無かった時代に、古代人が地上に巨大な絵を描く発想は、天空から地上を見下ろしている神への祈りの産物なののでしょうか。

(4)世界遺産・歴史遺産

初めての海外デビューはフランスで特に思い出は深くその後も2回フランスを訪問している。1回目は免震技術交換会、2回目はMITI大型プロジェクト研究技術交換会、3回目は旅行。海外の文化・芸術歴史遺産として印象に残っている代表的なものは、フランスではバロック建築の代表ベルサイユ宮殿、世界最初の高層鉄骨構造物パリ万博記念塔エッフェルタワーイタリアでは闘牛場他古代ローマ遺跡、ミラノゴシック建築大聖堂、ドイツライン川沿い古城ミュンヘンのオクトーバフエスタ、オーストリア・ウィーンは外周防護壁跡の路面電車・王宮、オペラ座、英国のウエストミンスター寺院、大英博物館等数限りないが、これら文化・芸術歴史遺産は皮肉なことに、全て当時の貧民層を統治した優秀な一部の支配者・貴族階級の栄華な生活の跡です。つまり私達が絶賛している歴史遺産は当時の奴隷・貧民を支配した極一部の王様・貴族の栄華な生活の跡であり、優秀な支配者階級無しでは世界遺産は生まれなかったとも言えるのではないのでしょうか。敷衍すると、現在は自由平等の世界なので、今後、人類の世界遺産と言えるものは残らない可能性が高い。

人類の滅亡は地球・太陽が無くなる50億年先、あるいは過去の預言者が提言したように新型コロナのようなウイルス・バクテリアが原因となるのかもしれないがウイルス・バクテリアについては人類の叡智で乗り越えられるが太陽の寿命が近づき地球に影響が及び始めると絶望的であると思われる。(太陽が赤色矮星になると地球の公転軌道の大きさになる)

(5)「記紀ふるさと巡り」の感想

「記紀神話の”まほろば地点”」を探索した順に感想は以下の通り。

①出雲紀行

古来出雲は神の国と呼ばれ、旧暦10月は日本全国神無し月で、全国の神様が出雲に集合するので出雲だけ神在月となる。其の由縁は、出雲の大国主がアマテラスに地上の支配権を譲る代わりに祭祀権の存続を許されたから。出雲(現在の島根県)は唯一風土記が完全な

形で残る貴重な地方でもある。恐らく、日本海を隔てて古代日本において、地理的に大陸（朝鮮半島）に最も近いと言う地の利で、小国家化形成が早く文化レベルも高かった事が要因ではないかと推測します。古代日本海の海上交通は思いの他に進んでおり、大陸からの渡来者も多かったようです。その一つが、ニニギに先行して、スサノオが新羅から降臨（海上渡来）したと言われる伝承があり、大和勢力は前方後円墳が基本であるが、出雲は独特の四隅はみ出し型の方墳で、日本海側に広く分布し、風土記でも北陸との婚姻詩が残る事から、出雲の勢力が北陸地方にまで及んでいたことになる。また近年、出雲の荒神谷遺跡から大量の銅剣・銅矛が出土したことから、過って出雲に強大な古代国家が存在したことが現実味を帯びてきている。このような歴史・文化を持つ出雲地域の魅力に惹かれて、じかに触れて見たいとの思いで、探訪に着手。現地見学したい主要な探索項目は四隅はみ出し方墳、神の国神社、スサノオ大蛇伝承、古代遺跡等。他にも弥生時代後期、日本で最初の鉄器製造（たたら製鉄）跡と北陸富山産ヒスイを原材料とする勾玉加工場跡を見学。

②壱岐対馬紀行

記紀に登場する次の九州地点（②壱岐対馬含む）は幸運にも中国「魏志倭人伝」に貴重な記録が残る。魏の特使は朝鮮半島・楽浪郡から伊都国まで直接到来したようだが、その先、倭国の記録は聞き取り情報のため信頼性に欠ける部分が多い。一番の問題点は邪馬台国までの所要日数と方向等に誤りが有り、九州まではほぼ正確で、その後記録通りに辿ると九州を越えて遥か南、太平洋のど真中に邪馬台国が存在する事になり、邪馬台国論争の原因となっている。とは言いながら、北九州までの各種記録、邪馬台国の人口、生活状況等、当時を知る上で貴重な実在する資料である。

②壱岐対馬は釜山まで約50km・1時間、博多からは70km・カーフェリーで2時間の位置に有り、地元の話では、釜山からの観光客が約8割で、日本からの客は少なく、経済は韓国におんぶに抱っこで韓国に感謝。日本からも沢山来て欲しいとの声。5月に島の北部で一ツ葉タブの絶景（まるで白い雪・雲のような花）を見る事が出来る。古代において九州玄海灘の銚崎海人が壱岐対馬に移住定着して、鉄商人として海を渡り大陸と交通していたようで、その生活痕跡は今も壱岐・対馬（厳原）にの残っている。

③北九州紀行

③AD57年に北九州の奴国王が後漢に朝貢して、金印を受領したとの記事が後漢書に記載されている。江戸時代、志賀島（海人・安曇一族が住む）で農作業中に偶然にも金印が発見されて金印は現在、貴重な国宝として福岡市博物館に保管されている。北九州一円の人々は当時の中国人から倭人と呼ばれて漁業の達人として崇められた、一方では倭寇として恐れられていた。北九州は当時、大陸文化受け入れ窓口として、縄文土器、弥生土器、水田稲作、青銅器・鉄器等新技術が大陸から日本で一番早く伝来された地域でもある。魏志倭人伝に記載された北九州の小国家として末盧国（唐津）、伊都国、（糸島市）、筑前国（粕屋郡）、奴国（春日市）、不弥国等がある。末盧国には日本最古の水田遺跡が残り、伊都国の平原王墓からは日本最大級の直径46.5cmの銅鏡が出土した。奴国は後漢に朝貢し光武帝から金印を授与された。奴国の比定地は福岡県春日市で須久遺跡等多数の遺跡がある国内最大の吉野ヶ里遺跡は縄文時代BC300頃から、弥生時代3世紀頃にかけて、環濠集落として最盛期を迎えている。魏志倭人伝の邪馬台国がどこかは未だ結論が出ていない。

④南九州紀行

記・紀探索の最後の探索地は④南九州である。探索の行程上ここでは南九州扱いとしていますが、北九州より南部の中部地域は南部に含めて探索しています。

天孫降臨地はどこなのかと言う課題は複雑です。古事記に北九州筑紫の”くじふるだけ”との記載が有り、伊都国南部高祖山と言う北九州説もある。中九州の高千穂峽を天孫降臨地と理解していましたが、この高千穂の峰の他に、霧島東神社にある霧島山の高千穂の峰（山頂に天の逆鉾あり）説、南九州加世田説、他に祖母山説等があるが、ここでは一般的に高千穂の峰と言われている地点を天孫降臨地として探訪した。

次に神武東征は架空なのかどうかは別にして、九州に古代国家が誕生して日向（宮崎県）の美々津から神武東征の出帆が始まったとして、瀬戸内海を經由して大和まで東征した説を採用して出発港を探索する事にしました。（なぜ東征が必要だったのか＝鉄売買か？）また、ニニギ命が霧島神社の祭神で、南九州加世田の竹屋神社近くの金峯町に日本発祥の地（地元では）伝承とニニギ命の笠狭宮（カサミヤ）があって、その後、ニニギ命が野間半島を經由して開聞岳近くまで遠征したと言う伝承もあり、降臨地は、遠く離れた高千穂の峰よりも南九州加世田辺りが降臨地として納得できる。（南九州探索における感想）また古事記の日向神話でもニニギ命は笠沙宮（野間半島）で木花佐久夜毘女と出会ったことになっているから。現在の降臨地である高千穂峰のように夜神楽等の伝統行事が伝承が無いことも弱い要因。

（おわり）